論文内容の要旨

論文題目　『十地経論』研究　―六相および唯心説を中心として―

氏　　名　　金　京南

本論文の目的

本論文で取り上げる『十地経論』(*Daśabhūmivyākhyāna,*DBhV)は、『華厳経』に編入される前の「十地品」=『十地経』(*Daśabhūmikasūtra,*DBh)に対する世親(Vasubandhu,400頃-480頃)の注釈である。『十地経論』は6世紀に菩提流支(Bodhiruci)によって訳出され、中国では同論を所依とする地論学派が成立し、後の華厳教学の形成にも多大な影響を及ぼした。また、インドでは唯識説の教証として重視された。

『十地経』は初期大乗仏教における菩薩の修行内容を説く代表的な経典であるが、中でも後代に重視され、発展的解釈と議論が活発に行われた教理に「六相」と「唯心」がある。

まず、六相は『十地経』においては、初地菩薩の十大願の中で菩薩行のある特徴を示す表現として登場するが、その意味内容の詳細をめぐっては、未だ議論は尽きない。世親は六相を『十地経』の経文を解釈する一つの方法と理解するが、地論師たちによってそれは単なる経典解釈法に止まらず、諸法の本質を理解するための重要な方便として捉えられ、さらに華厳教学にいたっては六相円融という独自の教説が完成する。

また、「三界唯心」句として知られる唯心説は、『十地経』の第六現前地において、第六

地に進んだ菩薩が観察すべき十二支縁起の様相として説かれている。この三界唯心句は『華厳経』「夜摩天宮菩薩説偈品」のいわゆる「唯心偈」とともに唯心説の典拠として知られるが、特にこの現前地の唯心文は、瑜伽行派の論書においてしばしば唯識義の教証として引用される。

このように、菩薩道の内容と関連して説かれたこれらの概念は、後代に受け継がれ、それぞれ華厳と唯識の理論の中に吸収されたのであり、ここで果たした世親の役割は大きい。そこで、本論文は六相と唯心にしぼって、それぞれの概念に対する世親の解釈を考察し、併せて、『十地経』の原意と比較することによって、『十地経論』を媒介とする発展と変容の様相を明らかにしたいと思う。

本論文の方法

上述したように、本論文では『十地経論』における六相説と唯心説を中心に扱うため、初歓喜地と第六現前地を主要な考察対象とする。そこで、『十地経論』の初歓喜地と第六現前地のシノプシスをそれぞれシノプシスIとシノプシスIIとして附する。それを参考にすると、まず、六相説で取り扱うのはシノプシスIの中の加分(3.2.2.1.3.)と勝分(8.2.1.4.)との二カ所である。前者は『十地経論』の注釈箇所に用いられたものであり、後者は『十地経』に典拠をもつ両文献共通の用例に相当する。一方また、唯心説は、シノプシスIIの中の2.2.2.に該当する。本論文の最後のテキスト篇で用いた両概念を含む箇所は、いずれもシノプシス上で太字によって表した。

本論文では先行研究を批判的に検討しながら、テキストに即して論を進める。まず、『十地経論』に関してはチベット語訳を中心とし、漢訳を参考にする。経文の引用箇所については『十地経』のサンスクリット写本、チベット語訳、および漢訳を参考にする。ここで、経文を取り扱う際は、一方の解釈を安易に他方に適用して解釈することを避けるべく、『十地経』と『十地経論』それぞれの文脈や用語などの相違点に注意を払いたい。

また、使用するサンスクリット写本は、東大写本3本(T1,T2,T3)、京大写本2本(K1,K2)、Cambridge大学本1本(C)、NGMPPによるネパール写本3本(N1,N2,N3)、パリ国立図書館本2本(P1,P2)、そして近年松田和信氏によって出版・紹介されたネパール国立古文書館所蔵本のうちのAを合わせた12本である。

この中で、特に現存する最古の写本であるA写本について注意したい。松田和信氏によると、Rahderは校訂本の作成にあたってA写本の写真を一部入手したと述べているものの

実際に用いることはなく、この写本はどの校訂本にも使われなかったとする。しかしながら、本論文において部分的ながらも対照した結果、Rahder 本の読みが、他のいずれの写本とも共通しない A 写本のみの読みと一致する例がしばしば見られ、Rahder 本が A 写本を使用していたことが推定できる。従来 Rahder 本については、写本の読みが正しく反映されていないなど、校訂上の問題点が指摘されてきたが、現行校訂本の見直しという意味においても A 写本との比較考察は意義のある作業と考える。

本論文の構成

本論文は、大きく序論、本論、附論、テキストおよび訳注からなる。

序論では、本論文の目的や方法等を紹介し、『十地経』および『十地経論』のテキストについて概観した後、『十地経論』に関する主な先行研究の成果および問題点を示す。

本論は、六相と唯心の二章からなる。六相説に関しては、既存の六相解釈を検討しながら、まず『十地経』本来の文脈に即して六相の原語とそれぞれの意味内容を検証する。次に、『十地経論』における六相の用例については、『十地経』の六相に対する注釈箇所と、六相をもって経文を解釈する両用例を考察する。また、特に成相と壊相の訳語の交錯に注目し、解釈の相違点や、それが後代に及ぼした影響等を考察する。唯心説に関しては、まず『十地経』における唯心文の原意および文脈上の問題点を確認し、次に『十地経論』にみる世親の唯心解釈を通して、後に唯心文が別出されるにいたった背景を探る。

次に、附論では、『十地経論』研究の一環として菩提流支の訳語について考察する。同論をはじめとして世親の多くの著作が菩提流支によって訳出されており、菩提流支訳の特徴を理解することは世親釈経論の研究においてきわめて重要な意味をもつと考えられる。この中で扱う『十地経論』の「如実修行」は、初地の第二誓願(8.2.1.2.)の用例である。

最後に、本論で考察した六相と唯心の該当箇所のテキストおよび訳注を附録として載せる。まず、チベット文とその訳注を、『十地経論』、そして該当する『十地経』の順で挙げ、その後に修訂したサンスクリットテキストを挙げる。